ムガル美術における聖母マリア

池田　直子

はじめに

本稿では，インド・イスラーム帝国ムガル(1526-1858)における聖母マリアのイメージについて分析を行う。ムガル帝国では，特に1580年代から1620年代の皇帝アクバル(在位1556-1605)とその後継者ジャハーンギール(在位 1605-1627)の統治期にかけ，キリスト教主題の細密画や壁画が多く描かれた[1]。その中でも聖母マリアは皇帝に特に好まれ，多くの作品が制作された。

ムガル朝における聖母マリア図像に関する研究は，マクレイガン[2]らインド・キリスト教史研究者によってはじめられた。マクレイガンは，ムガル朝とイエズス会の関係を綿密に研究し，聖母マリアをはじめとするキリスト教主題の図像が主にイエズス会によって布教の手段としてムガル皇帝に献上され，ムガル皇帝アクバルとジャハーンギールはそれらのイメージを好み積極的に収集しムガル宮廷画家にそれらを模倣させたこと，そして皇帝は改宗しなかったがイエズス会の活動を積極的に支援したことについて言及した。

本格的な研究は，ムガル美術史家のベイリー[3]によって行われた。ベイリーは，イスラームにおいてもマルヤム，つまり聖母マリアが重要な人物であり，ムガルに聖母マリアを受け入れる前提があったことや，聖母マリアがムガルの始祖神話におけるプロト・マザーであるアラーンクワーと同一視されていたことを明らかにした[4]。しかし，ベイリーは，細かい図像分析をおこなっておらず，また聖母マリア（＝マルヤム＝アラーンクワー）のイメージを後宮のトップである皇后や皇母とみなしたが，その解釈に十分な根拠をあげることができていない。

以上のことから，まず背景となるイエズス会とムガルの関係を確認した上で，聖母マリア図像の分析をこころみたい。

1. イエズス会のムガル布教

1540年，パウルス3世により正式に聖職者修道会として承認されたイエズス会は，16-17世紀に急速に発展，ヨーロッパを中心に数百の学校を開設，アジア，アフリカ，南北アメリカへ宣教活動を行った。初期の布教活動は，ポルトガルの保護を受け，アジアを中心に行われた。1542年にゴアへの布教は行われ，以降ゴアはアジア布教の中心地となった。

ムガル宮廷への布教は，すべてムガル皇帝の要望のもと計3回行われた。1580年に1回目，1591年に2回目，1595年に3回目に使節団がゴアから派遣された。皇帝は神父たちと親密な関係を築き[5]，ムガル領内でのキリスト教布教活動を公認し[6]，皇子たちにポルトガル語教育をほどこさせ，西洋言語の研究を推進し，西洋の宗教や歴史に関する書物をペルシア語へ翻訳させ，西洋絵画・版画の獲得を積極的に行い，宮廷画家たちに模倣させた。ムガル君主がこのように「異文化」を積極的に受け入れた背景には，ムガルが「外来政権」であり，非ムスリムが大多数である領土を支配するため，融和主義的な政治方針をとっていたことがあげられる。また，ムガルにはイエズス会士を皇帝主催の宗教議論場へ参加させるねらいや[7]，イエズス会士た

ちをポルトガルなどの西洋諸国との仲介役をさせる目的，それから西洋美術の様式をムガル宮廷画家に学ばせ，キリスト教絵画をムガル美術のプロパガンダに利用しようとする意図があったと考えられる。そしてイエズス会側は，皇帝がキリスト教に関心があることから皇帝の改宗を期待し，ムガル宮廷に使節を派遣した。

2. ムガルのキリスト教への教化

イエズス会士たちは，ムガル皇帝の改宗をめざし，皇帝のキリスト教への理解を深める努力をはらった。第1回布教のアックァヴィーヴァは主に議論を通じて，アクバルへカソリック教義の説明を行った。アックァヴィーヴァはアクバルの要請をうけ，度々宗教議論場(イバーダット・ハーナー，信仰の館)において皇帝の前でイスラーム法学者たちと議論を行い，皇帝を満足させる議論を展開し，皇帝のカソリック教義への造詣を深めた[8]。

また，3 回のムガル布教を通じて，教理問答集や神学書などのイエズス会の基盤となる書物が皇帝に献上された。ムガル宮廷の図書館にはローマの布教図書館の方針を反映し，専門的で，異教徒を対象とし，イメージを伴うものがもたらされた。皇帝の要望に応え，アクバルの関心のもつポルトガルの歴史や法に関するもの，またアクバルの宗教議論を念頭におかれた印刷物が保管された。1595 年の目録には，トーマス・アクィナスの『神学大全』や『対異教徒大全』，ロヨラの『霊操』，『イエズス会会憲』，ポルトガルの法，ポルトガル総督アルフォンソ・アルブケルケの手記，ラテン語文法書，フランドルの地理学者オルテリウス(1527-98)の世界地図 *Theatrum Orbis Terrarum*(1570) などがあげられている[9]。とりわけアントワープで出版され，ネーデルランドのエングレーヴィングの入っているプランタンの多言語訳訳聖書(1567-72)やナダールの図説福音書 *Evangelicae Historiae Imagines*(1593)の第 2 部 *Adnotationes et meditations* はムガル細密画に重要な影響を与えた。

そして第3回イエズス会布教の正使ヘローニモ・ザビエルは，イエズス会東インド巡察師ヴァリニャーノの指示によって，カソリック文学をペルシア語で執筆する新しい試みを行った。代表的な作品は，1602 年完成『聖なる鏡』(*Mirāt al-Quds*)と 1609 年完成『真実をあらわす鏡』(*Āyine-ye Haqq Numā*)の 2 作品である。『聖なる鏡』はキリスト伝で，新約聖書の物語から主にできており，キリストの降誕，キリストの奇跡と教え，キリストの受難，キリストの復活と昇天などが記述されている[10]。イエズス会士たちは，アクバルとサリーム皇子(後のジャハーンギール)にそれぞれ 1 冊ずつ写本を贈っているが，皇子はその挿画をきにいらず，ナダールの図説福音書中の約 150 場面と[11]，さらに他の場面の追加を自身の画家たちに命じていることがわかっており，少なくとも皇子は目にしていることが指摘されている[12]。そして『真実をあらわす鏡』は，アクバルが注文したものだが，彼の死後完成され，ジャハーンギール(在位 1605-1627)に献上された作品である。これも同様にザビエルが書いた問答集で，作品の中で神父，哲学者（おそらくアクバル)，イスラーム知識人の 3 者が討論を行う。アクバルやジャハーンギールのもとで実際に行われた議論もその中に含まれている。全5巻で，第1巻はキリスト教の教義について，第2巻キリスト教の神の教えについて，第3巻キリストの神格性について，第4巻キリスト教とイスラームの比較[13]，第5巻キリスト教の多数の救済について書かれている。

以上の宗教議論や，西洋出版物，イメージ，そしてペルシア語で書かれたカソリック文学を

通じ，皇帝はカソリック教義を熟知したと考えられる。それはイエズス会士とのイメージ効果に関する議論においてもみることができる。

3. イエズス会のイメージ効果

イエズス会は常に重要なイメージの奨励者であり，初期の段階より指導者達は視覚芸術が宣教活動において重要な役割を果たすことを認識していた。フランシスコ・ザビエルは，イコンや挿画入り書物を大量に布教地，インド，東南アジア，日本に運び，言葉の問題を克服しようとした[14]。3 代目総長フランシスコ・ボルハは挿画入り瞑想録を注文し，定期的に自身の祈りにおいてイメージを用い，サンタ・マリア・マジョーレ教会の聖ルカの聖母を画家にコピーさせ，ブラジルやインドへ送った。また，1593 年にはイエズス会初のナダールによる図説福音書，がアントワープから出版された[15]。イエズス会はこの図説福音書を，非キリスト教徒への布教に頻繁に用いた。

そして，イエズス会は布教活動に聖母マリアのイメージを特に用いた。聖母マリアのイメージはムガル帝国において人気があった。アクバルやジャハーンギールも聖母マリアのイメージを好み，宣教師たちに熱心に注文した[16]。イエズス会は教会に聖母マリアのイメージを時折飾り，それはムガル帝国の人々をひきつけた[17]。ムガル帝国の首都アーグラの教会において，1601 年のクリスマス近く，神父たちはサンタ・マリア・マジョーレ教会の聖ルカの聖母のコピーを展示した[18]。その聖母のイメージはあらゆる宗教の人々を魅了し，身分の低い者から貴族や皇族，皇帝まで大変人気があり，多い日には 1 日に 1000 人の人々が見学に訪れた。この聖母の影響力は大きく，それまでキリスト教に否定的であった人物が考えをあらためるということもあった。

さらに，ムガル皇帝とムガル宮廷の画家たちは，イエズス会のイメージの効果に関する考え方について，イエズス会士の書物や，イエズス会士との問答を通じ学んだ。

『真実をあらわす鏡』の第 3 巻において，ザビエルは，忘れやすい本質である人にとって宗教的イメージはキリストや聖人の偉業を人に思い出させるのに必要であるとし，イメージは言葉よりも宗教を深く理解する資質をもつと言及している[19]。

1607 年，ジャハーンギールは，物語やイメージのシンボルを理解するため，イエズス会士たちに対しキリスト教の版画や宮廷画家が描いた細密画についての説明をもとめた[20]。皇帝は，キリスト教美術におけるイメージの役割とアレゴリーの機能に関する多くの事柄について質問した。例えば，皇帝は，栄光の概念と肉体の美しさを分けて理解することが困難であったことから，磔刑の図像について，キリストを敬うのになぜ美しく描くのではなく惨めな状態に描くのか尋ねた。それに対し神父は，キリストの磔刑をみることによって，キリストは我々の罪によって死んだということを思い出すことができるからと言及した。また，偶像に関する問題として，皇帝の側近が，「聖母マリア図像に対してか，聖母マリア自身に対して」敬意をはらっているのか質問した。それに対し神父は聖母マリアのイメージを崇拝しているのではなく，イメージが表象するものを崇拝していると答えた[21]。その他にも，皇帝は，プットの意味について質問し，プットがアトリビュートの 1 つで，尊敬と敬意をあらわすシンボルであると理解した。

ザビエルは聖画像に厄除けの機能があるとみなしていた[22]。アクバルもイメージを通じて神

を知覚できると信じ[23]，ジャハーンギールはこの 1607 年の議論の後，1608 年に公的建築物の壁にキリスト教の聖人の絵を描かせており，イメージの効用やイコン，シンボルなどの意味を理解し，実際に活用したことがわかる。

4. アラーンクワー＝マルヤム＝聖母マリア

＜イスラームにおける聖母マリア，マルヤム＞

キリスト教の聖人の一部がイスラームにおいても預言者とみなされるなど，両宗教の間で聖なる人物として共通する人物も多く存在する。マルヤム，つまり聖母マリアもイスラームにおいて登場し，ムガル帝国においてキリスト教の聖母マリアを受け入れることは容易であった。

イスラームにおけるマルヤムは，コーランの中で最も注目されている女性で，マルヤムと名づけられた章があり，名前が言及されている回数も全体で４番目である[24]。マルヤムの物語は，『コーラン』と『ハディース』(預言者ムハンマドの言行録)にみられ，①マルヤムの誕生②マルヤムの寺院での養育③受胎告知④イーサー(＝イエス)の誕生⑤マルヤムに対する非難(婚姻外での出産)にわけることができる。

マルヤムの聖母マリアとの共通点は，マリアがダビデの末裔であるのと同様に選ばれた血筋であること[25]，すべての女性に対し優越していること[26]，処女懐胎などの点で共通する。大きく異なる部分は，マリアの子イエスは神の子であるのに対し，マルヤムの子イーサーは神の子ではなく，預言者の 1 人という点である[27]。また，イスラームにおいて「原罪」という観念は厳密にはないため[28]，「無原罪の御宿り」はない。しかし，『ハディース』において，マルヤムとイーサーはアダムの子孫中で唯一誕生時に悪魔に触れられていない純潔である人物たちとされている[29]。

＜ムガルのプロトマザー，アラーンクワー＞

アラーンクワーに関する記述は，1590 年代に皇帝のアドバイザーであるアブル・ファズル(1551-1602)によって制作された皇帝の年代記『アクバル・ナーマ』の中でなされている。この年代記には，ムガルの系譜からはじまりアクバルの治世途中までのムガル朝正史が書かれており，アラーンクワーはこの系譜の個所で登場する。

この系譜は，すべての人間の祖である預言者アダムからはじまり，かくされた「神の光」が 52 代の「王の中の王」たちを通じてアクバルに到達するまでを語る王権神授説である。アラーンクワーはこの計 53 人の「王のなかの王」の唯一の女性で，31 番目の「王のなかの王」として数えられている。彼女は，キヤート族の王女で幸運な星のもとに生まれ，若い頃から精神的・肉体的にも美しく，神智学の光が彼女の顔に見られ，額には神の秘密が顕示されていたと描写されている。また，彼女は隔離された純潔のスクリーンの後ろに座り，共同体の瞑想の秘密の部屋に住んでおり，成人すると，当時の王族の習慣に従って従兄でムガーリスターンの王であるズブーン・ビヤーンと結婚した。しかし，王は彼女にふさわしくなかったのではやくに亡くなり，彼女は王となった。そして，ある晩彼女はマルヤムと同様に受胎する。

「ある夜，神々しい光のような人がベッドで横たわっていると，神々しい光が突然テン

トの中にひとすじさしこみ，精神的知識と栄光の源である口と喉に入った。純潔の塔はイムラーンの娘マルヤムと同様な方法でその光によって妊娠した[30]」

このようにベイリーが指摘するように，『アクバル・ナーマ』の中では，イスラームのマルヤムとアラーンクワーが類似しているという記述がみられ，ムガル宮廷においてアラーンクワー＝マルヤム＝聖母マリアとみなされていたであろうことがわかる[31]。この 3 者の間には，聖なる場所で養育されたことや，神秘的な受胎をしたこと，そしてアラーンクワーのみは結婚しており処女であったかは不明であるが「アラーンクワーの清い子宮」という言及もあることから，処女の扱いがなされているという共通点がある。

5. ムガルにおける聖母マリア図像

イスラームでは，神の姿形が表現されず，生命をもつ生き物，人間や動物の表現自体が制約され，あるいはそれらの写実的表現が制約された。したがって，書道や動植物画・模様が発達し，絵画は基本的に写本の挿絵として発達した。そのためイスラームには自身の宗教図像がなく，イスラームの宗教主題を描く場合にはキリスト教美術から借用する場合も多かった[32]。しかしその場合においても『コーラン』や『ハディース』，中世イスラーム文学で言及されない聖人を描くことはなく，また基本的に物語画であった。

マルヤムも，『コーラン』におけるイーサーの出産の場面≪イーサーの誕生≫(fig.1) [33]にみられるようにムガル以前においても描かれた。この絵の中央の人物はマルヤムである。彼女はなつめやしの幹につかまっており，足下には小川が流れ，木の反対側には預言者を示す炎型の光背がつけられた赤ん坊が描かれている。この場面は，マルヤムが陣痛で苦しんでいると，下から声がきこえてき，足元に小川が設けられ，なつめやしの幹を自分の方にゆらし落ちてきた実を食べるようにと指示されている部分が描かれているように思われる。イーサーの誕生の場面であることを強調するためか，まだ生まれていないはずのイーサーが描きこまれている。この細密画は物語の一場面を描いた物語画であり，イスラームでは基本的にマルヤムの絵は物語画として制作された[34]。

ムガル宮廷においては，イスラームのマルヤムとして描かれているものはほとんどなく，聖母マリアとして描かれている。その聖母イメージは，物語画とイコンの 2 種類がある。物語画としては，主にイエズス会士が制作した「マリア伝」を含む「キリスト伝」の写本などの中にみられる。≪マリアの神殿奉献≫(fig.2)も，ザビエルが献上した「イエス伝」の挿絵の 1 枚である。中央の神殿の階段を昇っていくのがマリアであり，彼女の下には彼女が階段から落ちないよう両親が見守り，その周囲を人々が取り囲んでいる。

聖母マリアのイコンに関しては，多く制作されており，特に聖母子像が多い。様々なタイプのものがあり，祝福する幼子型(fig.3)，頬を聖母によせる幼子型(fig.4)，授乳する聖母(fig.6)，花に手をのばす幼子型(fig.7)などが作られた[35]。その他には敬虔の聖母のポーズをとったマリアの上部に幼いキリストが雲の上から祝福しているという異種のタイプ (fig.8)もみられる。

そして壁画においては，皇帝が謁見の間の自身の玉座近くに聖母のイメージを飾っていたことが知られている。最も早く記録されているものでは，1582 年の新年祭において，アクバルが

人々の前に姿を表すバルコニーの壁の上に聖母の絵が飾られていたという記述がある[36]。主要都市であるラホールとアーグラの宮殿においても，王の右にキリスト，左に聖母がかけられていた[37]。この様子は細密画にも記録されている(fig.9)。バルコニー中央に座る皇帝の上部，壁には皇帝の右にキリスト，左手に聖母が飾られている。これらの壁画における聖母マリアは単独のイコンで描かれていた。

ムガル宮廷では，聖母マリアの図像が多く制作された。それらはfig.5をコピーしたfig.4のように西洋図像をそのまま模倣した西洋様式の作品から，fig.6やfig.7のように，よりペルシア・ミニアチュールの様式で描かれた細密画まである。これらの聖母マリア像には，多くのものに光輪がつけられている(fig.3，4，6，8)。この光輪は聖性とアラーンクワーのムガルへと連なる光を表わしており，これらの聖母マリア像はムガルのプロトマザー，アラーンクワーをも表象している。聖母マリアはアラーンクワーやマルヤムをも表象していたのである。

その一方で，ムガル細密画では「マルヤム」や「アラーンクワー」として描かれた図像は稀である。1596年頃に描かれた≪アラーンクワーと3人の息子≫(fig.10)は，アクバルの年代記の挿絵として描かれたもので，物語画であり，ペルシア美術の伝統を引き継ぐ描き方であり，イコンではない。「マルヤム」や「アラーンクワー」は，キリスト教美術の聖母マリアの図像から学びそれら自身がイコンとして直接描かれることはなかった。

結論

イエズス会を積極的に受け入れる用意のあるムガル帝国において，世界への布教をめざしていたイエズス会は活発に布教活動を行った。イエズス会はムガル皇帝の改宗のため，皇帝にカソリックの教義を教え，教化の道具としてイメージを，特に人気の高い聖母マリアのイメージを用いた。聖母マリアの図像は，ムガル領内の多数を占める偶像崇拝を行うヒンドゥー教徒や，聖母マリア＝マルヤムを重要視するイスラームのムガルにとっても容易に受け入れられるものであった。ムガルはイエズス会の教化を通じ，イメージの効用やイコンのコンセプトについて学び，実際に活用しようとした。ムガルの支配権正統化の要であるプロトマザー，アラーンクワーは伝統的にマルヤムと同一視されており，これを聖母マリアとも同一視することによって，物語画の表現方法しかもたないアラーンクワー＝マルヤムを聖画像で表わすことに成功した。ムガルは，キリスト教に改宗することもなく，キリスト教のイコンをそのまま自らのプロパガンダとして利用したのである。

以上のことから，ムガル帝国において聖母マリアのイメージが多く制作された理由は，聖母マリアがマルヤム＝アラーンクワーと同一視され，聖母マリアのイメージは同時にマルヤムとアラーンクワーも表わせたこと，それからイコンは厄除けの機能があり，またイコンを用いることによって神を知覚することが可能とみなされたという2点があげられる。

[1] ベイリーは，キリスト教美術の影響を受けた他のアジアの国々とムガル帝国を比較し，「ムガル美術は，中国や日本においてよりはるかに，西洋様式と技法，特にカトリックの礼拝画を全霊をこめて採用，公的に認めた美術である。……ムガル・インドは産業革命以前に大規模に西洋美術を採用した唯一のアジアの大国である。」と述べている(Bailey, *Art and the Jesuit Missions in Asia and Latin America, 1543-1773*, Toronto, University of Toronto Press, 1999, p.112)。

[2] Maclagan, *The Jesuits and Great Mogul*, London, 1932

[3] Bailey, "Counter-Reformation Symbolism and Allegory Mughal Painting," Ph.D. 1998

[4] Gülru Necipoğlu("Framing the Gaze in Ottoman, Safavid, and Mughal Palaces", *Ars Orientalis*, vol.23, 1993)はベイリー以前にムガル朝は聖母マリアをアラーンクワーと同一視したのではないかという解釈を述べているが，詳説はしていない。

[5] 皇帝はイエズス会士たちを，身辺におき，宮廷の移動に動向させ，彼らの腕に手をまわし，夕所に世に同じテーブルで食事をした(Neil, *A History of Christianity in India*, p.174)。

[6] 1602年に勅令を発布。イエズス会士たちの自由な議論や説教を容認，教会の建設(1597年ラホール)，キリスト教にのっとった葬礼を公に行うことを許可した。

[7] 様々な宗教の関係者を議論させ，それらの議論を土台に，様々な宗教を信仰する人々を皇帝の下にまとめ，皇帝に忠実で信頼できる，一種の皇帝の幹部団をつくることを目的としていた。

[8] アックァヴィーヴァたちは最終的にアクバルに改宗の意志がないことに気がつき，ゴアへ帰還しより希望のあるプロジェクトへの参加を望み，最終的に1583年に皇帝の許可を得，ゴアへ帰る(Neill, Stephen, *A History of Christianity in India: The Beginnings to 1707*, Cambridge, Cambridge University Press, 1984, p.176)。

[9] ペルシア語に翻訳された本もあり，少なくともこれらの何冊かは実際にムガルたちによって読まれている(Bailey, Gauvin Alexander, "The Truth Showing Mirror; Jesuit Catechism and the Arts in Mughal India," O'Malley (eds.), *The Jesuits*, Toronto, Toronto University Press, 1999, pp.385-386)。

[10] Camps, *Jerome Xavier S.J. and the Muslims of the Mogul Empire*, Switzerland, 1957, pp.14-16

[11] ナダールの図説福音書は，「マリア伝」を数場面含む「キリスト伝」を153の場面にわけて文字キャプションとともに図解された印刷物である(宮下孝晴，吉住磨子「*Evangelicae Historiae Imagines*(1593)に関する一考察」『金沢大学教育学部紀要(人文科学・社会科学編)』第41号，1991，p.66)。

[12] Bailey, "The Truth Showing Mirror," 1999, pp.392-5

[13] この巻においては，十戒とコーラン，キリスト教の奇跡とイスラームの奇跡，キリストの生涯とムハンマドの生涯、ムハンマドの性格，両宗教の礼拝と巡礼，キリスト教の地球規模での流布とそれによって示された真実性についてが言及された(Bailey, "The Truth Showing Mirror," 1999, pp.386-389)

[14] Bailey, *Art and the Jesuit Missions in Asia and Latin America,* 1999, p.38

[15] ナダールは，この図説福音書を若いイエズス会士の教育目的に制作した（Buser, "Jerome Nadal and Early Jesuit Art in Rome", *Art Bulletin*, 58, 1976, p.425)。

[16] du Jarric, *Akbar and the Jesuits*, London, 1926, p.66

[17] 1580年，首都ファテープル・シークリー宮殿構内における礼拝堂において祭壇の上に聖母の模写を公開し，ヒンドゥーやムスリム双方の人々をひきつけた(カイサル『インドの伝統技術と西欧文明』平凡社，1998，p.163)。

[18] du Jarric, *Akbar and the Jesuits*, London, 1926, pp.160-172

[19] Bailey, "The Truth Showing Mirror," 1999, p.388

[20] Bailey, "The Truth Showing Mirror," 1999, p.389

[21] 「もちろん我々はマリアのイメージであるということでイメージを崇拝するのではない。われわれはイメージが単に彩色された紙やキャンバスにすぎないことをよく理解している。われわれはイメージが表象するもののためにイメージを崇拝するのだ。あなたがたのファルマーン（勅令）と同様である。あなた方はインクで書かれた紙だからではなく，命令や意思を含むこ

とを知っているから頭部におしいだくのだ。」(Bailey, "The Truth Showing Mirror," 1999, p.389)

22「神がこれらのイメージを肯定する十分の証拠がある。神は奇跡によってイメージを崇拝する人たちを特に味方したということがそれを証明した」(British Library, Harley 5478 fols. 286a-b.)。また,『聖なる鏡』の最初の物語もそれに関わるもので,エデッサの王は生死に関わる病に倒れ,画家がキリストに顔の外観を布にインプリントしてくれるよう祈ると,願いがききとどけられ,この奇跡の肖像は王を一瞬の間に治癒したというものである。

23 アクバルの摂政であったバイラム・ハーンは,預言者たちの顔を見ることは神自身を見るのと同じことであるとした(E. Denison Ross, ed., *The Persian and Turki Divans of Bairam Khan*, Calcutta, 1910, p.3)。

24 ムーサー(=モーセ)169 回,イブラーヒム(=アブラハム)69 回,ノア 43 回に次ぎマリヤムは 34 回名があげられている(Smith, "The Virgin Mary in Islamic Tradition", *The Muslim World*, vol.79, nos.3-4, 1989)。

25「神は,アダムとノアと,アブラハムの一族とイムラーンの一族とを選び出して,万民の上に置きたもうた」(『コーランⅠ』藤本勝次他訳,中央公論新社,2002,p.70,第 3 章 33 節)という一節と,マリヤムはイムラーンの娘であることからから,マリヤムは神に選ばれた血筋であるといえる。

26 「マリヤよ,神はおまえを選び,おまえを浄め,おまえを選んで世のすべての女の上に置きたもうた。・・・」(コーラン第 3 章 42 節)

27「・・・・・・イエスはちょうどアダムの場合と同様である。神は彼を土で造っておいて,それから,「あれ」と言いたまえば,彼はそうなったのである。」(『コーラン』第 3 章 59 節)
「・・・・・・メシヤこと,マリヤの子イエスはただの神の使徒であり,マリヤに授けたもうた神のみことばであり,神より出た霊である。それゆえ,神とその使徒たちを信ぜよ。けっして三者などと言ってはならない。やめよ,それがおまえたちのためにもともよいことである。神は唯一なる神。神を讃えよ。神に子どもがあってよいものか。・・・・・・」(『コーラン』第 4 章 171 節)

28 イスラームにおいて,罪とは一般的に神の啓示・導き・命令に反することである。また『コーラン』の楽園追放では,悪魔はアダムとハウワー(=エヴァ)の両者を直接誘惑する。

29 Smith, "The Virgin Mary in Islamic Tradition", 1989

30 Abu'l Fazl, *The Akbar Nama*, vol.1&2, tr. Beveridge, New Delhi, 1902, p.179

31 Bailey, "Counter-Reformation Symbolism and Allegory Mughal Painting," 1998, pp.326-327
このアラーンクワーとマルヤムの関連付けは,ムガルの先祖であるティムールの墓石にすでにみることができ,ティムール朝の伝統をついでいることがわかる。ティムールの墓石の碑文は間野英二「アミール・ティムール・キュレゲン」『東洋史研究』第 34 巻,第 3 号,1975,p.111 に記載されている。

32 Arnold, *The Old and New Testaments in Muslim Religious Art*, London, 1932

33 『コーラン』第 19 章 22−26 節

34 この≪イーサーの誕生≫はキリスト教の宗教主題からその構成を借用したものではない例外的な作品である。この場面はキリスト教にはないものであり,イスラームは自身でその図像を作らなければならなかった。アーノルドはこの≪イーサーの誕生≫を主題とした作品はそのためにほとんど存在しないと述べている(Arnold, *The Old and New Testaments in Muslim Religious Art*, 1932)

35 聖母子像のイコンの分類は,Shorr, *The Christ Child in Devotional Images*, New York, 1954 を参照。

36 Koch, "The Influence of the Jesuit Mission on Symbolic Representation of the Mughal Emperors," in Troll(ed.), *Islam in India*, vol. I, New Delhi

37 Foster, *Early Travels*, p.163, p.164

【図版目録】

fig. 1　≪イーサーの誕生≫16 世紀（Chester Beatty Library）
fig. 2　≪マリアの神殿奉献≫『聖なる鏡』より，1602 年頃（Lahore Museum）
fig. 3　≪聖母子≫ケースー・ダース，『ジャハンギール・アルバム』より(Staatsbibliothek)
fig. 4　≪木下の聖母子≫1600 年頃(Royal Library, Windsor Castle)
fig. 5　≪木下に座る聖母子≫デュラー，1513 年
fig. 6　≪聖母子≫バサーワン，1590 年頃(San Diego Museum of Art)
fig. 7　≪聖家族≫マニ，　1595 年頃（Free Library of Philadelphia）
fig. 8　≪聖母マリアとキリスト≫サリーム工房，1595-1600 年頃(Chester Beatty Library)
fig. 9　≪フッラム皇子にターバン飾りを贈るジャハーンギール≫パイヤーグ，『パードシャー・ナーマ』より，1640 年頃（Royal Library, Windsor Castle）
fig.10　≪アラーンクワーと 3 人の息子≫，『チンギス・ナーマ』より，1596 年頃

fig. 1

fig. 2

fig. 3

fig. 4

fig. 5

fig. 6

fig. 7

fig. 8

fig. 9

fig. 10